

休日出勤

休日の電車は家族連れが多くて
仕事疲れて眠そうにのろまのパパや
小さな子の手を引いて我勝ちにと
僕が座ろうかと思っていた席に飛びこむママや
その早さにつまづいて転んでしまう子や
そんな温かなぬくもりに僕は微笑をする

休日の問屋街は光だけが溢れて人影もなく
広い道は車もなく明るく輝いて眩しい
仕事場のドアを開くといつもにも増して
ぼかぼかとした空気が漂っていたのは
誰かが連れてきた可愛い男の子の
わけのわからないはしゃぎ声のせいかしら

^{ひる}昼食のサンドイッチを食べる僕らの方へ

えっちら歩いてきた彼は途中で転んで
「どうしてこうなったのかな？」と問うように
僕らの顔を怪訝そうに見つめて、泣きもせず
僕らは思わず笑う瞳で問い返す
「痛くはないね、男だもの」

(1984.2.24)